成果の説明書

(氏名)藤井孝宗	(学部)経済

1　重要事項

＜研究＞

今年度は「海洋資源輸出は資源枯渇を悪化させるか : 計量分析に基づく資源保護政策への示唆」というタイトルで科学研究費基盤研究(C)の競争的研究資金を獲得することができたため、以降４年間は本研究プロジェクトに全力で邁進する予定であった。しかし、その初年度となる今年度は、予定では研究に必要な様々なデータや資料収集のための調査出張を行うはずだったが、コロナ禍により全て実現できなかった。そのためすでに研究計画が大幅に狂っている状態である。研究書籍や学術論文の調査によりできるだけ埋め合わせを試みたものの、残念ながら期待するほどの成果を上げたとは言いがたい。次年度以降挽回するつもりではあるが、コロナ禍の状況次第では引き続き厳しい状態になるかもしれない。本科研費プロジェクト以外の研究成果としては、昨年度の学内研究奨励費の研究プロジェクト成果である以下の論文が本学地域科学研究所紀要『産業研究』に掲載された。

「海洋漁業資源の利用状況と資源枯渇」『産業研究』56.2, pp.1-21（2021 年 3 月）

本論文は今年度の科研費プロジェクトのための予備的調査の成果をまとめたものである。学内研究奨励費による調査研究をベースに科学研究費を獲得できたのは非常にありがたいことであり、学内研究費の存在意義が高いことが証明されたのではないかと思う。

＜教育＞

教育についても、今年度はコロナ禍により大幅な活動縮小、変更を余儀なくされた。特にリモート講義に対する対応は初めてだったこともあり非常な労力が必要となった。リモート講義のためにほぼ 0 から講義計画、講義資料などを作成しなければならず、また慣れないリモート講義の運営には神経も使った。教員側としてはやはり通常の講義ができればその方が圧倒的にやりやすくもあり、成果も上げやすいと感じた。しかし、併用するという形であれば、リモート講義の良さもかなり活かせるとも感じた。離れていても zoom などで簡単にゼミ学生などと打ち合わせができる点、課題や教材をネットを介して配布、回収できる点などは、コロナ禍が無事に終わってからも続けて活用できる有用な特徴であろう。

また、国際学科所属ゼミとして、例年は国際活動を積極的に行っているのであるが、今年度は海外語学研修、海外フィールドワークなどの活動がコロナ禍のため全てできなかった。仕方がないことではあるが非常に残念といわざるを得ず、ゼミ活動の中心的なものが失われてしまったため学生の落胆も非常に大きかった。できれば次年度に繰り延べて行いたいと考えてはいるが、コロナ禍の状況次第では引き続き難しいかもしれない。

＜学務＞

引き続き国際センター運営委員として活動したが、ある意味最もコロナ禍の影響を受けた委員会となったかもしれない。本学からの留学生の派遣、および本学への留学生の受入とも大幅に制限されざるを得ず、交換留学生がいなくなる、という状況にもなった。留学生の緊急帰国や入国のための様々な諸手続など、センター長及び事務局のご苦労に頭が下がる思いである。

また、学部教務委員の活動の一環として、カリキュラム等検討委員として活動し、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーの改訂、作成の業務を行った。こちらもコロナ禍のため講義の対策など教務委員会として行わなければならない業務が集中した

ため後回しとなってしまっていたが、今年度末にはディプロマポリシーに関してはある程度の形ができてきており、それに併せてカリキュラムポリシーを検討し、カリキュラムマップ、ツリーなどの作成作業に次年度は入れると予想する。

２　その他の事項

教育の工夫として、昨年度に続き１年生むけ必修科目である「市場と経済」という経済学の入門講義について、e-learning 教材を導入し、演習課題の強化とそれによる学生の復習の効率化・強化をはかるためのチャレンジを行っている。

学務としては、上記記載のものの他に、学部教務委員会委員として活動した。

３　次年度以降の計画・抱負

今年度はコロナ禍により研究、教育、学務とも大幅な活動の縮小、修正を余儀なくされた。次年度もコロナ禍の状況次第では今年度同様の研究教育活動への制約が予想されるが、できる限り研究、教育ともに進めていきたい。

研究については、現在行っている科研費研究プロジェクトに関して引き続き進めていく。４年プロジェクトの２年目であり、初年度である昨年度にコロナ禍のため調査研究のための出張ができていないため、初年度のフォローを行いつつ研究をできるだけ進めていきたい

学務については、次年度は学部の入試担当学部長補佐に任命されたため、入試制度の適切な運営及び評価、見直しなどについても積極的に取り組んでいきたい

授業については、コロナ禍の状況次第ではあるものの、可能となれば今年度できなかったゼミにおける国際的な活動、海外へのフィールドワークを再開し、学生が国際感覚を養うための活動を行っていきたいし、他大学ゼミとの合同研究発表会を通じた他大学学生との交流なども行っていきたい。